

金田一京助

アイヌ叙事詩の言語に分け入った人*

切替英雄

2012年11月22日

金田一京助(1882-1971)によって記録されたアイヌ叙事詩に、牡鹿たちが林の中で草を食む情景を叙した魅力的な一節がある。

| | |
|------------------|----------------------|
| Hanke-uk-pe | 近くの(草を)・はむ・もの(は) |
| ko-kirau-riki- | そのため・角(を)・たかだかと |
| pumpa kane, | 上げ・つつ |
| Tuima-uk-pe | 遠くの(草を)・はむ・もの(は) |
| ko-kirau-shi-ka- | そのため・角(を)・自分(の)・上(に) |
| omare kane, | 乗せ・つつ |

目の前の草を食べる牡鹿は頭を直下の地面に垂れ、そのために角が上を向いている。離れたところに生えている草を食べる牡鹿は頭を前方に伸べて、そのために角が横になり背に乗っているように見える。

金田一京助は大学2年の1906年、北海道南西部へ最初の調査旅行に出かけた。この旅行で、アイヌが長大な叙事詩を伝承していることを知り、その一部を筆記することができた。すでに出版されていたジョン・パチュラーの

* 『言語の20世紀101人』(『言語』2001・2別冊)大修館。2001年2月5日。34-35。改稿2012年11月22日。

アイヌ語辞典（第1版 1889）を使ってこれを解読しようとしたが、ほとんど理解できなかった。

白老でのサレッキという男性のアイヌが歌う「アイヌの民謡」を筆記したノートはこのように始まっている。

Gugoro guyubo gunugan rusui,
goroka, tuimano angusu
ene gugari isam.

これを現在よく行われている表記に改め逐語訳をつけると次のようになる (1st は一人称のこと、また兄とは恋人のこと)。

Ku-kor ku-yupo ku-nukan rusuy
1st-持つ 1st-兄(を) 1st-見 たい、
korka tuymano an kusu
けれど、遠く にいる から
ene ku-kar i isam.
どう 1st-する こと(も) ない(できない)

私は私の恋人を見たいけれど、(恋人は)遠くにいるから、
私にはどうすることもできない。

金田一はこの最初の旅行でアイヌ語の動詞と名詞に人称形があること、つまり動詞と名詞が人称を示す接辞をとることに確信を深めた。上の例では gu すなわち ku- がそれである。これは一人称を示すものであるが、ここでは歌い手のサレッキ本人ではなく、歌謡の中の「私」、つまり遠く離れている恋人をしたう女性を指している。三人称は、tuymano an 「(兄は)遠くに・いる」のように人称接辞が付かないことによって示される。

金田一はやはりこの旅行でアイヌ語に有声・無声の対立がないという重要な音韻論的事実に気が付いた。ただ、この時点ではもう一つの重要な特徴である音節末の弾き音 r [c] の存在に気が付いていない (kor が goro と、korka

が goroka とよけいな母音字を付けて書かれている)。これは後になって、1922 年頃、知里幸恵 (1903-1922) によって発見されることになる。

翌年、金田一は樺太に出かけた。比較言語学を学んだ影響もあったのであろう、樺太と北海道のアイヌ語を比較すれば解読できない叙事詩も明らかになることが多いのではないかという気持ちであったという。

樺太オチョポッカ村での 45 日間の調査 (4 千語の単語と 3 千行の叙事詩を採録する) では、アイヌの叙事詩が一人称説述体をなしていることが明らかになった。これはアイヌ口承文芸の最大の特徴ともいえるものであって、主人公が自らの経験を一人称で語るという叙述の形式をとることをいうのである。これが明らかになったのは、次のような事情からである。北海道の叙事詩で itak-an 「しゃべる」、a-kik 「(誰かを) たたく」などに現れる接尾辞 -an、や接頭辞 a- は物語の主人公が主語であることを示すものであるが、これに相当するものが樺太では日常語で一人称を示すのに用いられていたのである。なお、-an は自動詞 (一項動詞) に付き、a- は他動詞 (二項動詞、三項動詞) に付くものである。

樺太からの帰途、金田一はアイヌ語の研究を自分の仕事にしようと決意した。以後、叙事詩で用いられるアイヌ語 (金田一はこれを「雅語」と名付ける) の文法研究が彼の中心的な関心となる。

| | | |
|--------|-------|--------------|
| a-kor | kotan | a-ko-shirepa |
| 1st-持つ | 村 | 1st-に到着する |

これは「私は、私の (自分の) 村に到着した」ということを雅語で言ったものである。ko-shirepa は、「(だれそれが)(どこそこに) 到着する」という意味の他動詞 (二項動詞) であり (金田一は「不完動詞」と呼ぶ)、この派生動詞の元となる shirepa 「(だれそれが) 到着する」(自動詞または一項動詞。金田一は「完動詞」と呼ぶ) に「充当相」 applicative の接頭辞 ko- が付いたものである。一人称の接辞 a- は動詞の頭に付くものであるから、この動詞の人称語幹は ko- から始まっているということになる。ko-sirepa で一つの

動詞である。ko- は決して格助詞ではない。むしろ名詞項 a-kor kotan 「私の村」を捉えるために動詞が伸ばした腕のようなものである。事実、この接頭辞によって一項動詞が二項動詞に変えられているのである。

格助詞ならば別にある。上のような派生形を用いないで同義のことを言おうとすれば次のようになる。

a-kor kotan ta shirepa-an
1st-持つ 村 に 到着する-1st

先の例で a-kor kotan 「私の村」は他動詞の目的語になっていたが、ここでは格助詞 ta に支配されるものになっている。

最初に掲げた例の ko-kirau-riki-pumpa は二項動詞 pumpa 「～が～を持ち上げる」が目的語に相当する名詞 kirau 「角」と副詞的要素 riki 「たかだか」とを抱合し、さらに充当相の ko- をとった二項動詞である。ko- に捉えられている名詞項は、語としては現れていないが「近くの草」である。一方、ko-kirau-shi-ka-omare は三項動詞 omare 「～が～を～に載せる」が目的語に相当する2つの名詞 kirau 「角」と si-ka 「自分の上」を抱合し、さらに充当相の接頭辞をとった二項動詞である。この ko- に捉えられている名詞項は「遠くの草」である。なお金田一は抱合という用語を別の現象を指すのに使い、このような場合は輯合と呼んでいる。

以上金田一のアイヌ語研究でもっとも重要なものの中からいくつかのものに触れてみた。金田一によって、アイヌ語研究は、特に複雑な形態法の面で金田一以前とは比較にならないほど前進したのである。

金田一の全業績は現在『金田一京助全集』（三省堂、全15巻）によって見ることができる。そのうち最も重要なものは、「アイヌ語学講義」（全集第5巻）であり、これは叙事詩の言語を記述したものである。

しかし、なんといっても学問は人である。その人となりを知る上では、友人であった石川啄木の『ローマ字日記』（岩波文庫）および啄木との交友に関する文献が集められた全集第13巻が特に参考になる。